

2022.2
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とよ や
富 薬

2号

第44巻
No.391



デンジソウ *Marsilea quadrifolia* L.

(デンジソウ科 *Marsileaceae*)

生薬 ヒン（蘋） 夏から秋にかけて根ごと引き抜き水洗後乾燥する。

成分 未詳。

効能 清熱、利水、解毒、止血作用があり、眼充血、腎炎、肝炎、糖尿病、吐血、鼻出血、排尿痛、血尿などに用いる。化膿したできもの、リンパ節結核、乳腺炎、痔瘻の腫痛には外用する。主に中国で用いられる。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



小さな池一面に数えられないほどの四つ葉のクローバーを見て驚いた記憶があります。クローバー（シロツメクサ *Trifolium repens*）は普通3枚の小葉からなり、聖パトリックが「信・望・愛」に例え、4枚目の小葉を「幸福」と説いたと伝えられ、5,000から10,000本に1本しか見当たらない希少な4枚目が無数にあるのですから、なにか有難みが無くなってしまおうような話です。これがデンジソウでした。外見からは考えられませんがシダの仲間というのもまた驚きです。李時珍（1518-1593）は「この草は、四枚の葉が相集まって中央が十文字に折いてあるところから、俗に四葉菜、田字草、破銅銭などと呼ぶ」と言い、葉の形から名づけられたと言っています。和名も田字草の音読みから付けられたと思われま

す。和名も田字草の音読みから付けられたと思われま。ヨーロッパ、インド北部、アジア東部、国内では本州、四国、九州、沖縄の水田、休耕田、溜池、溝など水溜まりや緩やかな流れの場所で、日当たりのよい場所に生育する多年草です。かつては水田雑草で駆除の対象とされましたが除草剤の進歩などから現在では見ることが困難なほどの希少種で、絶滅危惧Ⅱ類に選定されています。根茎は長く伸びて、分枝して地表を這い、節から多数のひげ根を持った不定根を出して泥中に根をおろします。夏緑性で葉は根茎の節から1本ずつ根生し、葉柄は長さ5～30cm、先にクローバーに似た4小葉からなる葉をつけます。小葉は扇状で、日中は平開し、夜間は小葉を上たたみ、睡眠運動をします。展葉前の若い葉はゼンマイのように渦巻状に巻いているところがわずかにシダ類らしく見えるところです。シダ類ですから孢子嚢果が形成され、夏から秋、葉柄基部近くから出た短い枝に1-3個、楕円形、はじめは白い軟毛があり白く見えます。類似植物のナンゴクデンジソウ (*M. crenata*) は九州南部からアジアの熱帯域に分布し、東南アジアでは全草をサラダなど食用にしています。近年アジア南部産のナンゴクデンジソウが「ウォータークローバー」の名で観葉植物として流通しています。

「蘋」は『詩経』(BC1046-771)の国風・召南の采蘋に「于(ここ)に以て蘋を采る。南澗の濱(ほとり)に」と詠われ、かなり古くからその名が知られています。恐らく蔬菜として用いられたためと考えられます。本草書では『本草拾遺』(739)に「水萍に三種あり。大なるは蘋と曰う。…曝乾して栝樓と等分し、人乳を以て丸と為す。消渴を主る。擣き絞汁に取り飲めば蛇咬の毒腹に入るを主る。亦、熱瘡に傳くべし」と薬としての用い方が記されています。李時珍(1518-1593)は「四枚の葉が合成して一葉となり、田の字のような形になったものは蘋である」と、はっきり四枚の葉について記し、「蘋とは四葉菜のことである。葉は水面に浮び、根は水底に連り…四枚の葉が合して中が十文字に折け、夏、秋に小さい白色の花を開くところから白蘋と称する」と、デンジソウの形態を示しています。シダ類であるため花は咲きませんが、水中の孢子嚢果が白いところから花のように見えたと考えられます。

国内ではほとんど用いることがない薬ですが国内に自生することもあり古くから知られていたようで、平安後期の藤原隆季(1127-1185)を家祖とする四条家の家紋、四つ片喰紋は本来三つ葉であるカタバミ (*Oxalis corniculata*) がクローバのように極めて稀に見つかる四つ葉とも考えられますが、四つ葉のデンジソウととらえた方が自然だと思います。江戸初期の『多識編』(1612)になって「蘋、与豆波乃宇岐久佐」と四つ葉の水草の名と捉えています。『本草綱目啓蒙』(1803)では「蘋」の項に「池澤を生す。大さ一寸許、小葉四片一茎に合成す。酢漿草葉の如く田の字の形に似り。その質銀杏の葉の如し。夏花を開く。白色四弁なり。故に白蘋と云う」と、デンジソウの別名「カタバミモ」や四条家の「四つ片喰紋」の説明として納得がいきます。

(村上守一 記)